

[研究論文]

最近の社会における人々の振る舞いは、人の目にどう映るのか？

— 調査結果を通して —

大森 晶夫¹⁾・塚本 利幸¹⁾・吉川 公章¹⁾・橋本 直子¹⁾・
田嶋 長子¹⁾・深沢 裕子¹⁾・笹川 由佳¹⁾・小坂 浩隆²⁾・
高橋 哲也²⁾・石飛 信²⁾・梅澤有美子³⁾

1. はじめに

わが国における年間自殺死亡者数が30,000人を超えてから10年以上が経過した。自殺の背景には精神疾患の関与が大部分で、その中でもうつ病の比率が高いとされる¹⁾。そのうつ病を含む気分障害の総患者数が、2008年の厚生労働省「患者調査」²⁾で100万人を超えたことがメディアでとりあげられたのは記憶に新しい。職場においても、うつ病をはじめとした精神疾患による長期休職者の増加は今や珍しいことではなく、最近では休職からなかなか復職できない労働者の復職支援や“新しいうつ病”への対応などが課題になっている。

目を転じると、子どもたちに関する相談は、戦後の戦災孤児・浮浪児への対応から始まり、母子保健と障害児への対応（昭和30年代～40年代）、そして非行、いじめ、家庭内暴力、不登校（昭和50年代～）などへと時代とともに主たるテーマを変遷し、近年における児童相談所の業務は、児童虐待相談への対応に追われている状況にある³⁾。超高齢社会の日本では、高齢者虐待も問題となっており、虐待者のトップは同居の息子である。社会的には、高度経済成長を遂げた日本が、1990年代はじめにバブルがはじけた以降は、経済不安・政治不安が続くとともに、“秋葉原事件”のような凶悪犯罪や“おれおれ詐欺”などの悪質な事件が紙面や画面をにぎわしている。少なくとも中年世代以上の人たちにおいては、いつからか日本人の精神構造が変化したように感じているのではないか。

そこで、最近の日本人の振る舞いを人々がどのように感じているのかアンケート調査を行い、その結果を参考にしながら、精神医学や精神保健などの領域における近年の話題や傾向に触れ、若干の考察を加えたい。

受付日 2011.10.25

受理日 2011.11.14

所 属 ¹⁾ 福井県立大学看護福祉学部 ²⁾ 福井大学医学部病態制御医学講座精神医学領域 ³⁾ 福井大学保健管理センター

2. 方法

1) 調査対象

調査対象は、地域の老人クラブ連合会の研修会参加者、あるいは著者が講師を務めた講演会や研修会の20歳以上の参加者である。調査への協力は自由意志にもとづくこと、調査は無記名で個人が特定されないこと、結果は研究以外の目的には使用しないことを、口頭あるいは文書にて説明し、調査用紙の提出をもって同意が得られたものとした。

2) 調査期間

2010年7月から11月の期間に実施した。

3) 調査方法

無記名式質問紙調査法を用いた。

調査項目：

①基本属性：年齢、性別、仕事の有無、婚姻状況、子や孫の有無、同居の状況

②最近の日本社会における人々の振る舞いで感じる事（以下から5つ以内で選ぶ）

冒頭に述べたように、ストレス社会が叫ばれ、ストレス関連性疾患をはじめとした精神疾患患者が増加している。また、若年層を中心として規範意識、コミュニケーション力、自己抑制力、自尊心などからなる社会性が低下しているとの指摘もあり⁴⁾、それら近年示唆されている事柄を意識しながら、以下の26選択肢を設定した。「何よりもお金が大切と考えている」、「表面的な付き合いしかしない」、「自信がない」、「孤立している」、「不満が強い」、「ルールやマナーを守れない」、「自分には才能があると思っている」、「他人と会話ができない」、「目上の人や高齢者をうやまわらない」、「こだわりが強い」、「なにごとにもやる気がない」、「精神的に余裕がない」、「助けあおうとしない」、「目先の結果にとらわれている」、「ひどく疲れている」、「かまってもらいたい」、「希望や夢がない」、「我慢ができない」、「謙虚でない」、「他人の気持ちを思いやれない」、「他人の評価を気にしやすい」、「他人が信じられない」、「なにごとにも避けようとする」、「不安が強い」、「待つことができない」、「自分のことしか考えない」。

③②は、何に関連したり、影響を受けていると思うか（以下から5つ以内で選ぶ）

同じく、上記26選択肢に関連する項目を、近年の社会状況や通信技術の発達等を勘案して、以下のように設定した。「経験不足」、「政治」、「家庭での教育や環境」、「インターネット」、「少子化」、「学歴主義・成績偏重主義」、「素質」、「所得」、「携帯電話やメールの発達」、「職場での人間関係」、「核家族化」、「テレビ」、「地域での教育や環境」、「雑誌やマンガ」、「現代社会の経済状況」、「職場での仕事内容」、「学校での教育や環境」、「成果主義〔仕事の成果に応じて給与や昇格が決まる方針〕」、「その他（これを選んだ場合はカッコ内に具体的な内容を記入する）」。

④最近、自分自身に関して感じる事（②と同じ選択肢から、5つ以内で選ぶ）

⑤④は、何に関連したり、影響を受けていると思うか（以下から5つ以内で選ぶ）

自分自身に関することであるため、③の選択肢に加えて、「年齢」、「自分の健康」、「家族の健康」、「気がねなく話せる人がいないこと」、「過去のできごと」、「現在抱えている具体的な悩み」を加えた。

4) 分析方法

SPSS17.0J for Windows を使用し、比率の比較には χ^2 検定、2 群間の平均値の比較には t 検定、多群では分散分析を行った。p < 0.05 を有意、p < 0.1 を有意な傾向ありとした。3) の②の回答項目のカテゴリー化には、エクセル統計2010 for Windows を用いて数量化Ⅲ類を行った。

なお、本論文では最近の日本人の振る舞いを人々がどのように感じているのかを主題としているため、上記調査項目のうち④と⑤は分析せず、扱っていない。

3. 結果

1) 調査対象者の基本属性 (表 1)

回答が得られたのは215人で、男性86人 (40.0%)、女性126人 (58.6%)、21歳～89歳までの平均年齢59.9歳であった。20歳～39歳は33人と少なかったが、65歳以上のいわゆる高齢者と65才未満に分けるとほぼ半々であった。その他、職業の有無、婚姻状況、子や孫の有無、家族構成を含めた基本属性を表 1 に示した。

2) 最近の日本社会における人々の振る舞いで感じると回答した項目 (図 1)

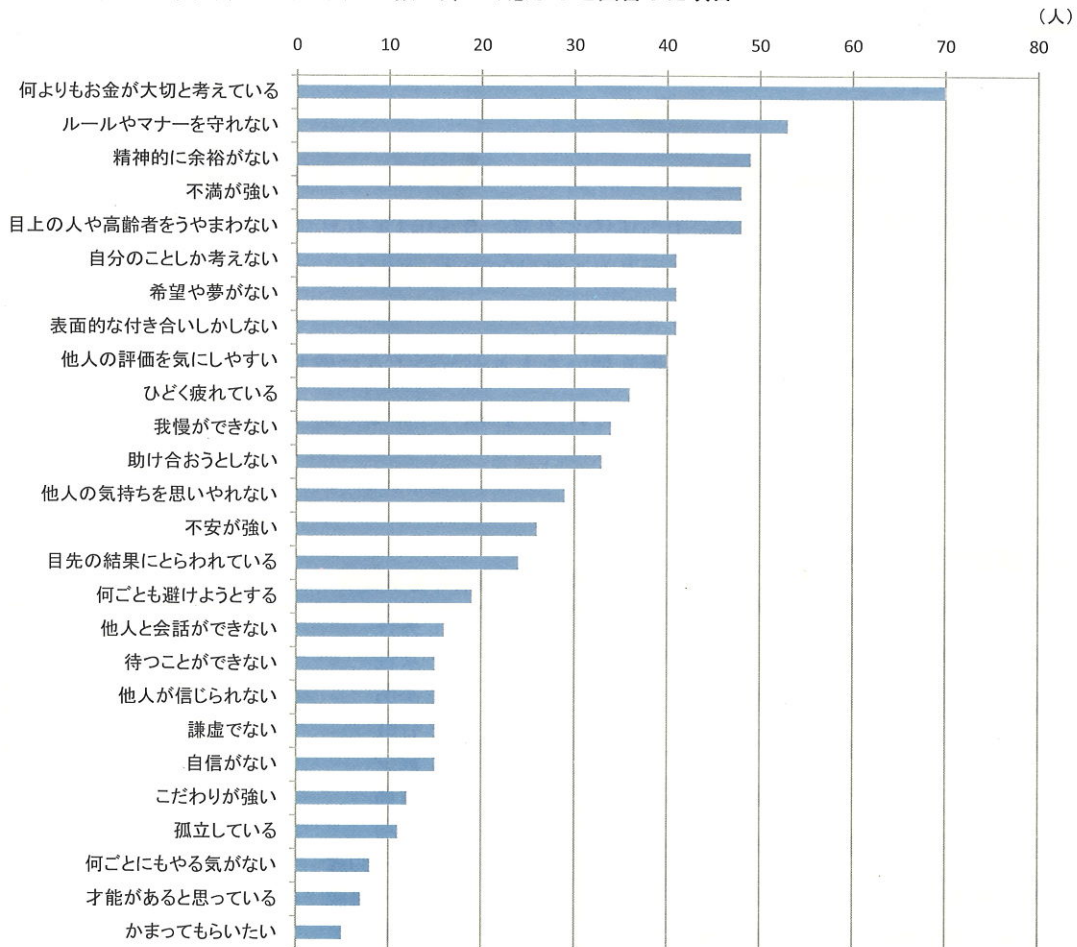
複数回答であるため、各項目を選んだ人数には重複があるが、最も多かったのは「何よりもお金が大切と考えている」で70人であった。次いで、「ルールやマナーを守れない」が53人、「精神的に余裕がない」が49人で、「不満が強い」と「目上の人や高齢者をうやまわれない」が48人で続いていた。以下

表 1 回答者の基本属性

性別	男性	86 (40.0%)
	女性	126 (58.6%)
	不明	3 (1.4%)
	合計	215
年齢	最少	21
	最高	89
	平均	59.9±18.3
	20～39歳	33 (15.3%)
	40～64歳	72 (33.5%)
	65歳以上	107 (49.8%)
職業	有	101 (47.0%)
	無	89 (41.4%)
	不明	25 (11.6%)
	合計	215
婚姻	している	144 (67.0%)
	していない	44 (20.5%)
	不明	27 (12.6%)
子や孫	子も孫もいる	86 (40.0%)
	子のみいる	58 (27.0%)
	子も孫もいない	38 (17.7%)
	不明	33 (15.3%)
家族構成	1人暮らし	21 (9.8%)
	配偶者との2人暮らし	47 (21.9%)
	その他	87 (40.5%)
	不明	60 (27.9%)

単位は、最少年齢、最高年齢、平均年齢のみ歳で、他は人。
() 内は総数に対する割合。

図1 最近の日本社会における人々の振る舞いで感じると回答した項目



上位10番目までは、「自分のことしか考えない」(41人)、「希望や夢がない」(41人)、「表面的な付き合いしかしない」(41人)、「他人の評価を気にしやすい」(40人)、「ひどく疲れている」(36人)であった。

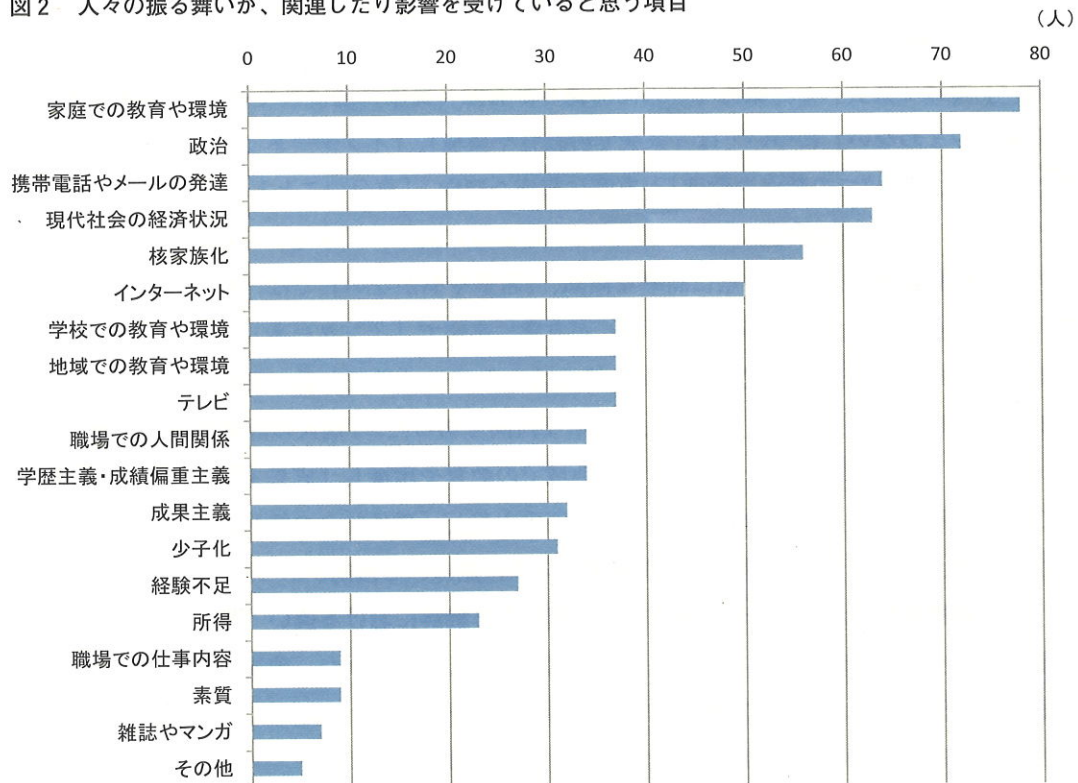
3) 人々の振る舞いが、関連したり影響を受けていると思う項目 (図2)

「家庭での教育や環境」が最も多く78人、以下上位10番目までは「政治」(72人)、「携帯電話やメールの発達」(64人)、「現代社会の経済状況」(63人)、「核家族化」(56人)、「インターネット」(50人)、「学校での教育や環境」(37人)、「地域での教育や環境」(37人)、「テレビ」(37人)、「職場での人間関係」(34人)、「学歴主義・成績偏重主義」(34人)の順であった。

4) 人々の振る舞いとして上位に選択された項目に、それぞれ関連したり影響を与えていると思う項目 (表2)

クロス集計により、最近の日本社会における人々の振る舞いで感じる、前述の上位10項目を

図2 人々の振る舞いが、関連したり影響を受けていると思う項目



選択した対象者が、人々の振る舞いが関連したり影響を受けていると思う19選択肢の中で選んだ比率が高かった項目を表2に示した。

最多である「何よりもお金が大切と考えている」については、有意に高率に選ばれた項目はなかった。「ルールやマナーを守れない」には「インターネット」と「携帯電話やメールの発達」

表2 人々の振る舞いとして上位に選択された項目と、それに関連したり影響を受けているとして選択された項目

人々の振る舞いとして選択された項目	順位	関連したり影響を受けているとして高率に選択された項目
何よりもお金が大切と考えている	1	
ルールやマナーを守れない	2	インターネット、携帯電話やメールの発達、学歴主義・成績偏重主義*、核家族化*
精神的に余裕がない	3	政治、現代社会の経済状況、成果主義
不満が強い	4	素質、職場での人間関係
目上の人や高齢者をうやまわない	4	家庭での教育や環境、インターネット、核家族化、学校での教育や環境*
自分のことしか考えない	6	インターネット、核家族化、雑誌やマンガ、家庭での教育や環境*、学歴主義・成績偏重主義*
希望や夢がない	6	政治、所得、現代社会の経済状況、職場での仕事内容、インターネット*、テレビ*
表面的な付き合いしかしない	6	学歴主義・成績偏重主義、職場での人間関係*
他人の評価を気にしやすい	9	学歴主義・成績偏重主義、地域での教育や環境、成果主義
ひどく疲れている	10	学歴主義・成績偏重主義、現代社会の経済状況、その他、所得*、成果主義*

*は $p < 0.1$ 、他は $p < 0.05$ (χ^2 検定)。

達」が有意に高率、「学歴主義・成績偏重主義」と「核家族化」が有意に高率に選ばれる傾向があった。「精神的に余裕がない」では「政治」、「現代社会の経済状況」、「成果主義」、「不満が強い」では「素質」と「職場での人間関係」が有意に高率に選ばれていた。「目上の人や高齢者をうやまわない」については「家庭での教育や環境」、「インターネット」、「核家族化」が有意に高率、「学校での教育や環境」が有意に高率な傾向、「自分のことしか考えない」では「インターネット」、「核家族化」、「雑誌やマンガ」が有意に高率で「家庭での教育や環境」と「学歴主義・成績偏重主義」が有意に高率な傾向、「希望や夢がない」では「政治」、「所得」、「現代社会の経済状況」、「職場での仕事内容」が有意に高率で「インターネット」と「テレビ」が有意に高率な傾向、「表面的な付き合いしかしない」では「学歴主義・成績偏重主義」が有意に高率で「職場での人間関係」が有意に高率な傾向であった。「他人の評価を気にしやすい」については「学歴主義・成績偏重主義」、「地域での教育や環境」、「成果主義」が有意に高率、「ひどく疲れている」では「学歴主義・成績偏重主義」、「現代社会の経済状況」、「その他」が有意に高率、「所得」と「成果主義」が有意に高率に選ばれる傾向があった。

5) 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の年齢群における違い (表3)

最近の日本社会における人々の振る舞いで感じるとして選ばれた、前述の上位10項目が、年齢群（以後便宜的に、20歳～39歳を壮年群、40～64歳を中年群、65歳以上を高年齢群とする）でどのように選ばれているか（順位と選択率）を表3に示す。

最多である「何よりもお金が大切と考えている」は、高年齢群で46.5%が選んでおり1位、中年群でも3位（30.0%）であったが、壮年群では18位と選択率は低かった。その他年齢群別で違いが目立つのは、「不満が強い」において中年群で1位（41.4%）であるのに対して高年齢群では15位（9.1%）、「他人の評価を気にしやすい」は壮年群で選択率50.0%で1位に対して中

表3 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の各年齢群における順位

人々の振る舞いとして選択された項目	全体での 順位	各年齢群における順位			有意確率 (両側)
		20歳～39歳 (n=33)	40歳～64歳 (n=72)	65歳以上 (n=107)	
何よりもお金が大切と考えている	1	18 (6.3%)	3 (30.0%)	1 (46.5%)	p < 0.001
ルールやマナーを守れない	2	4 (31.3%)	3 (30.0%)	2 (21.2%)	
精神的に余裕がない	3	2 (40.6%)	2 (31.4%)	5 (14.1%)	p = 0.002
不満が強い	4	6 (28.1%)	1 (41.4%)	15 (9.1%)	p < 0.001
目上の人や高齢者をうやまわない	4	15 (9.4%)	3 (30.0%)	2 (21.2%)	p = 0.063
自分のことしか考えない	6	10 (15.6%)	3 (30.0%)	5 (14.1%)	p = 0.032
希望や夢がない	6	6 (28.1%)	8 (27.1%)	7 (13.1%)	p = 0.042
表面的な付き合いしかしない	6	4 (31.3%)	11 (21.4%)	4 (15.2%)	
他人の評価を気にしやすい	9	1 (50.0%)	12 (17.1%)	8 (12.1%)	p < 0.001
ひどく疲れている	10	3 (37.5%)	9 (24.3%)	19 (7.1%)	p < 0.001

()内は選択率を示す。有意確率は、各年齢群での選択率の差の検定における0.1未満のp値のみを記載(χ^2 検定)。

年群では12位（17.1%）で高齢群でも8位（12.1%）、「ひどく疲れている」も壮年群で上位（選択率37.5%で3位）であったが中年群では9位（24.3%）、高齢群は19位（7.1%）であった。

一方、「ルールやマナーを守れない」と「精神的に余裕がない」は、いずれの年齢群でも選択率5位以内と高かった。

6）人々の振る舞いとして上位に選択された項目の性別における違い（表4）

同じく、前述の上位10項目が、男女別ではどのように選ばれているか（順位と選択率）を表4に示す。

性別による大きな違いはなく、「不満が強い」においてのみ、女性で2位（27.7%）であるのに対して男性では10位（17.1%）と、選択率に有意な差がある傾向がみられた。

7）人々の振る舞いとして上位に選択された項目の仕事の有無における違い（表4）

同じく、仕事についている人とついていない人で順位と選択率を比べると、「不満が強い」では有職群で1位（32.7%）であるのに対して無職群では10位（17.4%）と選択率に有意差があり、「何よりもお金が大切と考えている」は、無職群で41.9%が選んでおり1位、有職群でも3位（28.6%）であったが、選択率には有意な差の傾向があった。

8）人々の振る舞いとして上位に選択された項目の婚姻状況における違い（表4）

結婚している人といない人で順位と選択率を比べると、「他人の評価を気にしやすい」のみで両群間に有意差があり、結婚していない群で1位（34.9%）であるのに対して結婚群では10位（16.4%）であった。

9）人々の振る舞いとして上位に選択された項目の子や孫の有無における違い（表5）

人々の振る舞いで感じるとして選ばれた、前述の上位10項目が、子や孫の有無でどのように選ばれているか（順位と選択率）を表5に示す。

表4 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の各年齢群における順位

人々の振る舞いとして 選択された項目	全体で の順位	各性別での順位		有意確率 (両側)	仕事の有無別での順位		有意確率 (両側)	結婚状況別での順位		有意確率 (両側)
		男性 (n=82) 63.4±19.2歳	女性 (n=119) 57.3±17.3歳		あり (n=98) 49.7±17.1歳	なし (n=86) 66.9±14.7歳		している (n=140) 62.3±14.9歳	していない (n=43) 41.4±18.0歳	
何よりもお金が大切と考えている	1	1 (32.9%)	1 (35.3%)		3 (28.6%)	1 (41.9%)	p=0.064	1 (37.1%)	3 (30.2%)	
ルールやマナーを守れない	2	2 (26.8%)	3 (26.1%)		4 (26.5%)	2 (31.4%)		2 (30.0%)	6 (25.6%)	
精神的に余裕がない	3	4 (22.0%)	3 (26.1%)		2 (30.6%)	4 (22.1%)		4 (25.7%)	4 (27.9%)	
不満が強い	4	10 (17.1%)	2 (27.7%)	p=0.091	1 (32.7%)	10 (17.4%)	p=0.027	6 (22.9%)	2 (32.6%)	
目上の人や高齢者をうやまわない	4	7 (18.3%)	3 (26.1%)		6 (23.5%)	3 (23.3%)		3 (27.1%)	13 (14.0%)	
自分のことしか考えない	6	11 (15.9%)	6 (23.5%)		7 (22.4%)	5 (19.8%)		5 (23.6%)	13 (14.0%)	
希望や夢がない	6	3 (25.6%)	11 (16.8%)		5 (24.5%)	8 (18.6%)		7 (21.4%)	8 (23.3%)	
表面的な付き合いしかない	6	7 (18.3%)	7 (21.0%)		7 (22.4%)	5 (19.8%)		7 (21.4%)	9 (20.9%)	
他人の評価を気にしやすい	9	7 (18.3%)	7 (21.0%)		10 (21.4%)	5 (19.8%)		10 (16.4%)	1 (34.9%)	p=0.017
ひどく疲れている	10	13 (14.6%)	9 (20.2%)		7 (22.4%)	11 (16.3%)		10 (16.4%)	4 (27.9%)	

()内は選択率を示す。有意確率は、各群での選択率の差の検定における0.1未満のp値のみを記載(χ²検定)。

「何よりもお金が大切と考えている」では子も孫もいる群で選択率45.9%で1位であるのに対して子がいる群27.3% (5位)、子も孫もいない群21.6% (7位)、「精神的に余裕がない」では子がいる群で36.4% (1位)、子も孫もいない群で37.8% (2位) が選択したのに対して子も孫もいる群では16.5% (4位)、「不満が強い」で子がいる群で30.9% (2位)、子も孫もいない群で32.4% (3位) が選択したのに対して子も孫もいる群では15.3% (7位)、「他人の評価を気にしやすい」では子も孫もいない群で45.9% (1位) が選択したのに対して子がいる群で20.0% (11位)、子も孫もいる群で9.4% (14位)、「ひどく疲れている」では子も孫もいない群で32.4% (3位) に対して子がいる群で25.5% (8位)、子も孫もいる群で9.4% (14位) と、それぞれ選択した比率に有意差が認められた。「自分のことしか考えない」に関しては、

表5 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の子や孫の有無における順位

人々の振る舞いとして選択された項目	全体での順位	子や孫の有無別の順位			有意確率 (両側)
		子も孫もいる (n=85) 79.9±7.0歳	子がいる (n=58) 50.7±12.3歳	子も孫もいない (n=37) 35.1±14.6歳	
何よりもお金が大切と考えている	1	1 (45.9%)	5 (27.3%)	7 (21.6%)	p = 0.012
ルールやマナーを守れない	2	2 (25.9%)	2 (30.9%)	5 (27.0%)	
精神的に余裕がない	3	4 (16.5%)	1 (36.4%)	2 (37.8%)	p = 0.009
不満が強い	4	7 (15.3%)	2 (30.9%)	3 (32.4%)	p = 0.040
目上の人や高齢者をうやまわない	4	2 (25.9%)	8 (25.5%)	15 (10.8%)	
自分のことしか考えない	6	4 (16.5%)	2 (30.9%)	13 (16.2%)	p = 0.089
希望や夢がない	6	4 (16.5%)	5 (27.3%)	6 (24.3%)	
表面的な付き合いしかしない	6	7 (15.3%)	5 (27.3%)	7 (21.6%)	
他人の評価を気にしやすい	9	14 (9.4%)	11 (20.0%)	1 (45.9%)	p < 0.001
ひどく疲れている	10	14 (9.4%)	8 (25.5%)	3 (32.4%)	p = 0.004

()内は選択率を示す。有意確率は、各群での選択率の差の検定における0.1未満のp値のみを記載(χ²検定)。

表6 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の同居状況別における順位

人々の振る舞いとして選択された項目	全体での順位	1人暮らし (n=21) 58.3±18.9歳	配偶者と2人暮らし (n=46) 70.9±9.7歳	その他 (n=86) 58.1±16.8歳	有意確率 (両側)
何よりもお金が大切と考えている	1	4 (25.0%)	1 (47.8%)	1 (34.9%)	
ルールやマナーを守れない	2	4 (25.0%)	3 (26.1%)	3 (27.7%)	
精神的に余裕がない	3	4 (25.0%)	3 (26.1%)	4 (26.5%)	
不満が強い	4	2 (35.0%)	16 (8.7%)	4 (26.5%)	p = 0.022
目上の人や高齢者をうやまわない	4	1 (40.0%)	2 (30.4%)	9 (18.1%)	p = 0.072
自分のことしか考えない	6	13 (10.0%)	3 (26.1%)	6 (22.9%)	
希望や夢がない	6	13 (10.0%)	12 (13.0%)	2 (28.9%)	p = 0.044
表面的な付き合いしかしない	6	10 (15.0%)	7 (19.6%)	8 (19.3%)	
他人の評価を気にしやすい	9	4 (25.0%)	16 (8.7%)	9 (18.1%)	
ひどく疲れている	10	3 (30.0%)	8 (15.2%)	12 (13.3%)	

()内は選択率を示す。有意確率は、各群での選択率の差の検定における0.1未満のp値のみを記載(χ²検定)。

子がいる群で30.9%（2位）に対して、子も孫もいる群で16.5%（4位）、子も孫もいない群で16.2%（13位）と、選択率に有意な差の傾向があった。なお、3群の平均年齢には明確な違いがあった。

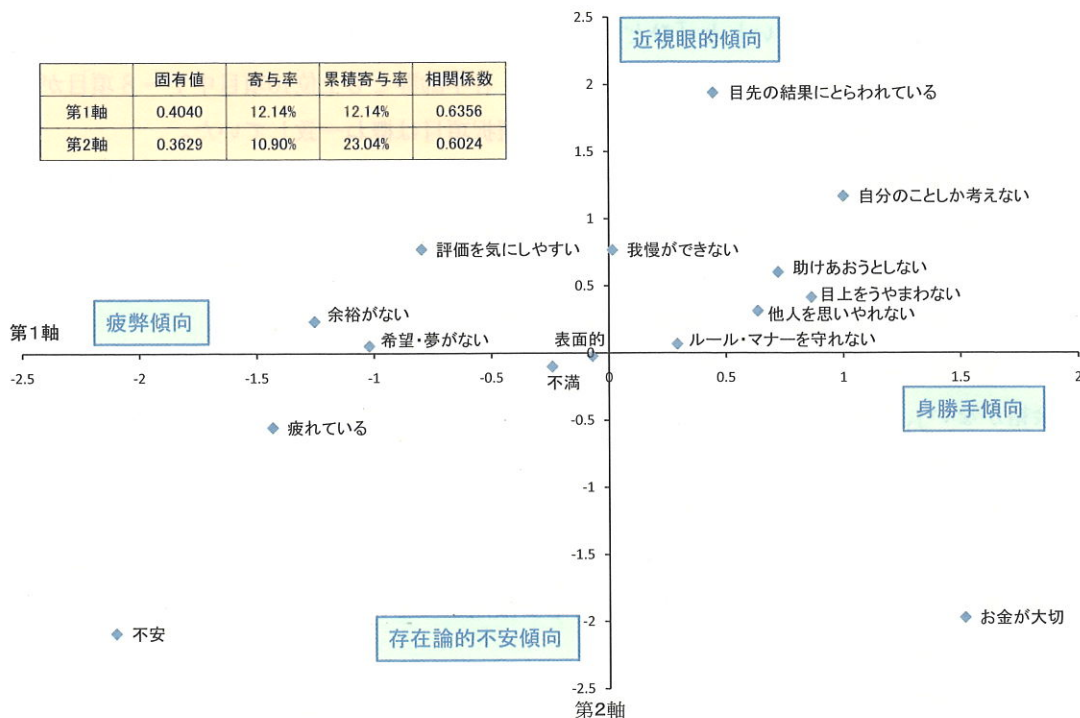
10) 人々の振る舞いとして上位に選択された項目の同居状況における違い（表6）

同居状況の違いで順位と選択率を比べると、「不満が強い」では1人暮らし群で35.0%（2位）、その他群で26.5%（4位）が選択したのに対して配偶者と2人暮らし群では8.7%（16位）、「希望や夢がない」ではその他群で28.9%（2位）に対して1人暮らし群で10.0%（13位）、配偶者と2人暮らし群で13.0%（12位）と、それぞれ選択した比率に有意差が認められた。「目上の人や高齢者をうやまわらない」では1人暮らし群で40.0%（1位）、配偶者と2人暮らし群で30.4%（2位）が選択したのに対してその他群では18.1%（9位）と選択率に有意な差の傾向があった。

11) 最近の日本社会における人々の振る舞いとして感じる項目のカテゴリー化（図3）

人々の振る舞いとして選択しうる26項目のうち、実際に選択した人数（反応数）が20以上の項目を、数量化Ⅲ類を用いて分析した。図3に示すように、相関係数は第1軸が0.6356、第2軸が0.6024であった。第1軸は、カテゴリー値がマイナス側に大きい-0.5以下に、「不安が強い」（14位）、「ひどく疲れている」（10位）、「精神的に余裕がない」（3位）、「希望や夢がない」

図3 最近の日本社会における人々の振る舞いとして感じる項目のカテゴリー化



い」(6位)、「他人の評価を気にしやすい」(9位)、プラス側に大きい+0.5以上には、「何よりもお金が大切と考えている」(1位)、「自分のことしか考えない」(6位)、「目上の人や高齢者をうやまわない」(4位)、「助けあおうとしない」(12位)、「他人の気持ちを思いやれない」(13位)が位置しており、疲弊傾向と身勝手傾向の弁別軸と解釈した。一方、第2軸の解釈は難しいが、プラス方向に大きなカテゴリー値を示している「目先の結果にとらわれている」(15位)、「自分のことしか考えない」(6位)、「我慢ができない」(11位)、「他人の評価を気にしやすい」(9位)などの近視眼的傾向と、マイナス側に大きなカテゴリー値の「不安が強い」(14位)や「何よりもお金が大切と考えている」(1位)といった存在論的不安傾向⁵⁾の弁別軸と解釈した。

4. 考察

1) 調査結果の要約

人々の振る舞いとして感じる項目は、「何よりもお金が大切と考えている」、「ルールやマナーを守れない」、「精神的に余裕がない」、「不満が強い」、「目上の人や高齢者をうやまわない」、「自分のことしか考えない」、「希望や夢がない」、「表面的な付き合いしかしない」、「他人の評価を気にしやすい」、「ひどく疲れている」の順に選択率が高かった。

これら上位10項目について、年齢群別では、「何よりもお金が大切と考えている」と「目上の人や高齢者をうやまわない」は、高齢群と中年群で上位に対して壮年群では選択率が低く、「他人の評価を気にしやすい」と「ひどく疲れている」はその逆パターンであった。「不満が強い」は、中年群のみで選択率が高かった。ただ、各年齢群とも上位10項目中7～8項目が全体での10位以内であり、人々の振る舞いとしての選択項目は概ね一致していた。

男女では選択項目にあまり差がみられなかった。一方、有職者は社会を「不満が強い」と選択し、無職者は「何よりもお金が大切と考えている」と捉える率が高かった。また、結婚していない群では、「他人の評価を気にしやすい」の選択率が高かった。子や孫の有無によってみられた選択項目の違いは、その年齢層の違いを反映しているように思われた。

26の選択肢を反応数20以上の項目に限ると、「不安が強い」、「ひどく疲れている」、「精神的に余裕がない」、「希望や夢がない」、「他人の評価を気にしやすい」の疲弊傾向、「何よりもお金が大切と考えている」、「自分のことしか考えない」、「目上の人や高齢者をうやまわない」、「助けあおうとしない」、「他人の気持ちを思いやれない」の身勝手傾向に大きくカテゴリー化された。また、「不安が強い」は疲弊傾向と存在論的不安傾向がともに顕著、「何よりもお金が大切と考えている」は身勝手傾向と存在論的不安傾向がともに顕著、「目先の結果にとらわれている」は近視眼的傾向が顕著であった。

これら人々のメンタリティとして感じる項目に関連すると思う項目の間では、「家庭での教

育や環境」、「政治」、「携帯電話やメールの発達」、「現代社会の経済状況」、「核家族化」、「インターネット」などが全体としては多く選ばれていた。人々の振る舞いとして上位に選ばれた項目には、それぞれ関連項目として選択率の高いものがみられたが、1位の「何よりもお金が大切と考えている」に関連していると考えられている項目には一貫性がなかった。

以降は、これらの調査結果を踏まえつつ、わが国における精神保健の現状と課題に関連付けて述べて行く。

2) 疲弊した現代人

疲弊傾向を示す選択肢グループのうち、特に選択率10位内である「精神的に余裕がない」、「希望や夢がない」、「他人の評価を気にしやすい」、「ひどく疲れている」については、最近の人々、特に壮年から中年層の一つのイメージとして異論がないのではないだろうか。そして、そう思える背景としては、「政治」と「現代社会の経済状況」の社会状況、「所得」、「成果主義」、「職場での仕事内容」といった労働関係、「インターネット」、「テレビ」のメディアの影響、そして「学歴主義・成績偏重主義」や「地域での教育や環境」などが高率に挙げられていた。

近年のわが国における最もセンセーショナルな精神保健課題の一つとして自殺がある。2万人から2万5千人で推移していた年間自殺者数が、1998年に32,863人に急増して以来、10数年経った現在に至るまで3万人を超え続けている。自殺率は社会経済的要因により変動し、特に失業率と強い相関を示すことが知られている。この自殺者急増には当時起きていた日本社会の変化が関連していると報告され、バブル経済崩壊後の経済不況のダメージを、特に都市部の中高年が受けた前年比増加率35%という異常事態であった。2002年からは30～39歳男性の自殺率が上昇を示しており、非正規雇用労働者の増大による雇用構造の変化の影響が類推されている⁶⁾。男性の自殺率は女性の2.6倍で、職業別では「無職者」、「被雇用者」、「自営者」、「主婦・主夫」、「学生・生徒」、「管理職」の順に自殺者が多く、社会状況と仕事は、失業者も含めて、日本人のメンタリティに大きく影響を及ぼしていることは間違いない。

その状況の中、精神疾患による長期休職者の増加と相まって、自殺予防対策としても職場におけるメンタルヘルス対策の推進が重要視されるようになった。自殺対策の指針として閣議決定された「自殺総合対策大綱」⁷⁾には、「自殺を図った人の直前の心の健康状態を見ると大多数は、様々な悩みにより心理的に追い詰められた結果、うつ病、アルコール依存症等の精神疾患を発病しており、これらの精神疾患の影響により正常な判断を行うことができない状態となっていることが明らかになってきた」と記されているように、世界保健機構（WHO）の調査でも、15,629例の精神障害をもつ自殺者の自殺前の診断は、気分障害30.2%、物質関連障害（アルコール依存症を含む）17.6%、統合失調症14.1%、パーソナリティ障害13.0%と続き、気分障害（うつ病を含む）の頻度が最多であったと報告されている⁸⁾。今回の調査で上位にランクされた「精神的に余裕がない」、「希望や夢がない」、「ひどく疲れている」状態が続けば、それ

こそうつ病にもなりかねない。実際、うつ病を含む気分障害患者が、2008年の患者調査（厚生労働省）で100万人を超え、30～50歳代の働く年代では男女とも相当数の患者が認められている²⁾。

このような「自殺予防はうつ病予防から」という流れでのうつ病に関する啓発の成果か、「ストレス→うつ病」という認識が、職場や一般の人々に浸透しつつある。“本当の”うつ病であったとしても、薬物治療によりうつ病は治るというメディカルモデルが強調されると、条件の良い会社では「治る病気なら治して戻ってきなさい」となるが、それでは職場環境の整備を含めたその予防や、リハビリテーションモデルの浸透、組織化が妨げられるとの指摘もある⁹⁾。平成19年の厚生労働省・労働者健康状況調査では、全労働者の58.0%、一般社員では61.8%が「強い不安、悩み、ストレスがある」と答え、その内容は「職場の人間関係」が38.4%で1位、「仕事の質の問題」が34.8%で2位、「仕事の量の問題」が30.6%で3位の順であった¹⁰⁾。このように、実際の労働者たちは過労、過度な責務などによって疲弊し「憂うつ」を呈することや、上司や部下との関係で「憂うつ」になっていることは多いが、これらの状態イコールうつ病ではない。現在の産業場面では、短期利益追求で守られ感不足の状況が続き、「人を大切にする会社」という発想が本質的には難しい。つまり、病気にかかった人だけではなく、普通に働いている年代の人たちが、「政治」、「現代社会の経済状況」、「成果主義」などの煽りを受けた厳しい条件の中で、「所得」、「職場での仕事内容」などに悩み、「余裕がなく」、「希望がなく」、「疲弊して」見えることを、今回の調査も指摘している。

社会経済の悪化に伴い崩壊し始めた従来の終身雇用制度と年功賃金制度後の切り札として導入された成果主義には、「総人件費の抑制・削減」と「成果を競うことで労働者の生産意欲を高める」という二つの大きな狙いがあった。しかし、その成果主義と近年における労働者のメンタルヘルス悪化には因果関係が指摘され¹¹⁾、日本生産性本部メンタルヘルス研究所のJMI健康調査（心の定期健康診断）によると、成果主義賃金制度の導入によって、従業員の意欲や探究性、評価への満足も「一時的には高まった」が、長期的には労働時間や精神的ストレスを増大させ、従業員の意欲も疲労も結局「より悪化」した。その増大するストレスとは、具体的に「残業時間が増え長時間労働となる（裁量労働制の場合は、残業手当もない）」、「ノルマと進捗管理が厳しくなり、『仕事の要求』が強まる」、「『裁量性』が乏しくなる」、「上司や同僚とのコミュニケーションが悪化し『職場の支援』も悪化する」、「賃金・仕事・訓練・研修に対する満足や納得が低下する」、「その結果、全体として『評価に対する不満』を高める」、「労働者は一人でする仕事が増え個別化が進む」、「雇用関係においても個別労務管理化が進み、離・退職圧力が増す」などとされている。明確な成果主義導入でなくても、短期のベンチマークを達成することをよしとする現況では、多くの職場で同様の事態が起こっていることは実感するところであろう。さらに、男性一般労働者30～40代における賃金格差も拡大していると報告されて

いる。仕事の質的ストレスである「仕事の要求 (Job demand)」、「裁量性 (Control)」、「職場の支援 (Support)」（JDCA モデル）や努力 (Effort) と報酬 (Reward) の不均衡 (Imbalance) (ERI モデル) が、心の病を増やすことは既に実証され、しかもそれにライフイベントを加えて、それぞれ相乗的に、つまり掛け算式に心の健康を悪化させることが解明されている。そして、労働者の「将来への希望」、「仕事への負担感のなさ」、「仕事への意欲」、「同僚との関係」、「帰属意識」は、格差を職場に持ち込むことにより低下することが示され、結局産業界全体の活性を下げるという負のスパイラルをもたらす¹¹⁾。このような近年の労働者のおかれた状況を考えると、今回の調査で、「他人の評価を気にしやすい」が「余裕がない」、「希望がない」、「疲れている」に類似した項目としてカテゴリー化されたことも理解しやすく、ともに産業精神医学研究が示唆する“疲弊した現代人”を映し出していることになる。また、「他人の評価を気にしやすい」は、「目先の結果にとらわれている」などと同じく、近視眼的傾向ともとらえられる。つまり、自分なりの価値観や、長期的・歴史的スパンでの評価よりも、身近にいるものの評価に影響されやすく、場合によってはその場限りの対応や結果を求めることになり、疲れるのみで、個人としても組織としても深化することにはならない。

「希望や夢がない」に影響することとして、「インターネット」や「テレビ」も有意に選ばれる傾向があった。「雑誌やマンガ」と合わせて、メディアとしての機能を含んでいる項目である。特に「テレビ」は、19項目中7番目の頻度で選ばれているが、人々の振る舞いには「希望や夢がない」以外で関連付けて選択されることはなかった。今回の結果に関しては、近年の混乱した政治・経済・社会情勢を報道する媒体だからという理由が考えやすいように思う。ただし、報道のあり方にも議論があるところで、例えばテレビでは、いわゆる報道番組が増え、その中では政治・経済の悪化や、犯罪や事件などがその手口を含めて、各局において大枠では同じ内容で繰り返し報道されている。また、世論調査による評価、あるいは責任の在りかや言葉の誤りなどへの追及は、ともすれば執拗かつステレオタイプでもあり、“暗く、厳しく、希望をもてない社会”として視聴する人々のメンタリティに影響を及ぼすこともあるかもしれない。

3) 規範意識の変化

「何よりもお金が大切と考えている」、「目上の人や高齢者をうやまわさない」、「自分のことしか考えない」、「助けあおうとしない」、「他人の気持ちを思いやれない」は、この順に選択率が上位から中位を占め、カテゴリー化では身勝手傾向が強い選択肢であった。「ルールやマナーを守れない」は、全体として2番目に多く選ばれており、またカテゴリー値は約0.3と身勝手グループ項目の近くに位置していた。「何よりもお金が大切と考えている」は壮年群での選択率が低かったが、「ルールやマナーを守れない」、「目上の人や高齢者をうやまわさない」、「自分のことしか考えない」の上位項目は総じて各年代を通じて支持されていた。「何よりもお金が

大切と考えている」に影響しているとして高率に選択される項目はなかったが、これらに影響していることとしては、「インターネット」、「携帯電話やメールの発達」、「学歴主義・成績偏重主義」、「核家族化」、「家庭での教育や環境」、「学校での教育や環境」、「雑誌やマンガ」が選ばれることが多かった。

「インターネット」、「携帯電話やメールの発達」は、場所や状況を選ばずにメールやネット、携帯電話を使用したり、場合によってはメールやいわゆる掲示板等での中傷といった携帯電話やインターネット発達の結果を意識した回答かもしれない。人々の振る舞いに影響するとして、「携帯電話やメールの発達」は3番目、「インターネット」は6番目に多く選ばれており、評判がよくないことになるが、われわれはその発達自体の恩恵にはあずかっている。その2項目が、「家庭での教育や環境」(1位)、「核家族化」(5位)、「学校での教育や環境」(7位)など選択率の高い項目とともに身勝手カテゴリーに関連しているとして選ばれていることから、インターネットや携帯、メールもそれ自体は有用なテクノロジーであるが、教育や環境問題に関係して、利用の仕方によってはイメージが悪くなるというところであろう。

「ルールやマナーを守れない」、「目上の人や高齢者をうやまわない」、「自分のことしか考えない」などは、規範意識の低下とも表現できるかもしれない。その最たるものが犯罪で、冒頭で凶悪犯罪や悪質な事件が新聞紙面やテレビ画面を連日のようににぎわしていると述べた。殺人については長期的には減少傾向、最近20年間はほぼ横ばいで傷害致死も減少しており、やはりセンセーショナルな報道によるインパクトが影響しているかもしれない。ただし、平成22年度版犯罪白書のはしがきには、「最近の我が国の犯罪情勢は、平成14年に一般刑法犯の認知件数が戦後最多を記録するなど危機的状況にあったが、国民と政府とが一体となって治安の回復に取り組んだ結果、犯罪の増勢には一定の歯止めが掛かるなど改善しつつある。しかしながら、長期的に見ると、治安状況にはなお厳しいものがあり、国民の治安に対する不安感は改善されていない。その主因は、国民に重大な危害を加える殺人、強盗、強姦等の重大事犯の発生状況にあると思われる。重大事犯も、認知件数は、平成15年ころからは減少傾向にあるものの、最近20年間で見ると、減少している状況ではなく、強盗では、平成の初めころの3倍程度の高水準にあり、治安を維持し、国民の平穏な生活を守る上で、重大事犯への対処は、最も重要な課題である。」とある¹²⁾。その他具体的には、高齢者や外国人による犯罪の増加、再犯者率の増加なども指摘されているが、これら犯罪もまた社会経済の悪化に追従している側面は認められる。

ただ、おそらくこれらの項目を選んだ時にイメージしているのは体感治安の悪化までではなく、もっと身近なモラルの低下であろう。「自分のことしか考えない」自分勝手な主張と行動、ボーダーレスな自由が拡大して「目上の人をうやまわない」ようになる一方、他人の行為に敏感で、傷つきやすく、自分が傷つけられると他罰的となる。そういった自己愛傾向を示す青年

の増加は日本でも1990年代から注目され、その背景には周囲の仲間との交流の機会の減少や少子化による過保護な養育、それらを修正する手応えのある大人の非存在と内的価値を重視しない時代などが指摘されてきた¹³⁾。今回影響する項目として選ばれた「核家族化」、「家庭での教育や環境」、あるいは「学校での教育や環境」、「学歴主義・成績偏重主義」は、まさにその関連性通りの結果となっていた。年月は経過し、そういった自己愛傾向は青少年にとどまらず、今では中高年にまで拡散している。また、教育や商業のフィールドではモンスターペアレントやクレイマーという言葉が定着して久しく、さらには政治やメディアの世界の自己愛傾向も進行していると言えなくはない。

4) “隠れナルシスト”と“新しいうつ病”

上述のように自己愛傾向の拡大がみられるが、元来日本社会では自己主張が強く、気性が激しい性格や行動は好まれないため、建前では隠しつつも、本音は自己愛的という隠れナルシストが多数存在し、しかも昨今の経済不況に伴うストレスに耐えつつ生き抜くには、むしろそれは好都合かもしれないとの主張がある¹⁴⁾。そして、最近の精神科における診療場面や産業精神医学の現場で、あるいはメディア等で注目されている“新しいうつ病”には隠れナルシストの香りがするという。

“新しいうつ病”とは、専門的には逃避型うつ病¹⁵⁾、未熟型うつ病¹⁶⁾、現代型うつ病¹⁷⁾、ディスチミア親和型うつ病¹⁸⁾、非定型うつ病¹⁹⁾などとしてその存在が指摘され、一般には新型うつ、あるいは30代うつ²⁰⁾などとして知られるようになった。最近のうつ病患者の急増には、社会環境の変化による個人にかかるストレスの増大とともに、精神科にかかることに以前のような抵抗がなくなったことや国際的な診断マニュアルが広まったことなどの関係も示唆されている²¹⁾。つまり、マニュアルの症状を満たせば、細かな検討なく疑わしきほううつ病と診断している可能性がある。そう診断されているうつ病の中に、従来のうつ病と新しいうつ病が含まれているのである。

従来の定型うつ病とは、中高年（特に男性）に多い、好きなことであってもできない、午前中は調子が悪く夕方ころ比較的元気になる、自己犠牲的な献身的態度、自責的、控え目で慎重、人に頼まれると断れない、不眠や食欲低下を伴い、薬物治療が効果的なことが多いなどの特徴がある。そうなりやすい性格としては、几帳面で生まじめ、頑張り屋、完全主義、要領が悪い、秩序を重んじる、仕事熱心で頼まれるとノーと言えない、自己犠牲の精神、ストレスをためやすいなどと考えられている。一方“新しいうつ病”は、若い世代（どちらかというと女性）に多い、好きなことはできるが嫌いなことはできない、突然感情のコントロールができなくなる、自己愛傾向、他罰的傾向が強い、他人の些細な一言で傷つくなどの特徴があり、自ら診断書を求めうつ病であることを正当化して休職や配置換えなどを要求・主張することも少なくない。薬物治療の効果は限定的で、逃避傾向を助長せず、問題や現実への直面化も考慮しながら、時

には背中を軽く押す程度の励ましが必要となる¹⁴⁾。

調査では、上位に選ばれていた「自分のことしか考えない」、「目上の人や高齢者をうやまわない」、「ルールやマナーを守れない」に「核家族化」、「家庭での教育や環境」、「学校での教育や環境」、「学歴主義・成績偏重主義」の関与を指摘していたが、近年の青少年を取り巻く状況変化による規範意識や社会的スキル、そして自尊心の低下が社会的に叫ばれている側面に合致している。この傾向が続くとすれば、うつ病界では、自尊心や社会的スキルの乏しさの上に自己愛傾向が重畳した”新しいうつ病”が増加し、その人たちが自分勝手な要求を繰り返すことによって、職場に残された人たちの中に定型うつ病が発生するという負の循環が起りうるのである。

5) 安全・安心をもてない人々

「不安が強い」は疲弊傾向の最も端に位置するとともに、存在論的不安傾向も顕著と考えられた。調査で使用した「自信がない」や「孤立している」も、相互に関係する項目と思われるが、それらの選択率は今回低かった。他覚的に目立たない項目ということもあるかもしれない。価値観の多様化、労働環境の流動化、伝統的なコミュニティの崩壊、家族の不安定化、媒介され脱空間化された経験の一般化（インターネットの普及）等の要因によって、世界の安定性を自明視できない傾向が広がってきているとの見方がある⁵⁾。昨今の日本においても、世界や社会の安定性そのものに対する漠然とした不安を感じざるを得ないベースはあるであろう。

2007年にユニセフの研究所が発表した先進国の子どもたちの幸福度調査結果では、日本はそれぞれのデータ項目で他の先進国より悪く、特に「孤独を感じる」と答えた15歳児の割合が他国が5～10%であるのに対して29.8%と突出して高かった²²⁾²³⁾。国内におけるQOL尺度を用いた調査では、「自尊感情」、次いで「学校」という項目が低く、しかもそれらは小学校4年生くらいから顕著に下がり始め、中学生～高校1年生に至るまで下がり続けており、しかも平均値として低いという問題に加えて、個別に自尊感情が極端に低い子どもが多くみられたという。大学生をはじめとする青年層でも自己評価の低さが指摘され、「不安が強い」、「自信がない」、「孤立している」はさらに上の年代にまで広がりを見せている。これらのことには、親や社会が描くパターン化した理想像とのギャップ、学歴・成績偏重主義などによる評価疲れ、あるいは、社会全体に余裕がなくなり親たちや教員たちに余裕がなくなったことなども関係しており、同様に、社会や親、教員自身も安全・安心を感じることができなくなっている。精神科外来患者が増加しているが、その内訳は気分障害と神経症性障害、そして認知症である²⁴⁾²⁵⁾。気分障害の増加については既に述べたし、高齢化率の増加に伴った認知症の増加も周知のとおりである。その中で、「不安」を主訴とする神経症性障害の増加には、パニック障害、全般性不安障害、社交不安障害、強迫性障害、解離性障害などの安全・安心の欠落の反映ともいえる病態の増加が関与している。その他に増加している拒食や過食を呈する摂食障害患者たちも、まさに

その自己評価の低さがゆえに痩せることに強迫的となり、あるいは過食に走るのである。「ひきこもり」や「ニート」の一部も、類似したストーリーで表現型を変えた社会現象と解釈できる。

6) 行きつく先

世の人々が、調査で示されたような状況に置かれているとすれば、どこへ行きつくのだろうか。

人々の振る舞いとして最も多く選ばれた「何よりもお金が大切と考えている」は、身勝手傾向の端に位置するとともに、存在論的不安傾向も顕著であり、いわゆる拝金主義も一つの帰結かもしれない。経済状況の悪化という単純な理由に加えて、価値や規範の多様化、社会的な紐帯の崩壊を代替するものとして、相対化した世界における唯一の共通尺度としてお金への拘泥といった解釈も可能である⁵⁾。

従来の定型うつ病になりやすい几帳面で生まじめ、秩序を重んじる、自己犠牲の精神などといった性格はメランコリー親和型性格と呼ばれる。今の社会では、職場全体が「メランコリー親和型化」しているとして、そこから生じる問題も指摘されている²⁶⁾。すなわち、仕事量は増え、内容が複雑化した上に、職場外からは消費者、市民、マスコミなどのミスや虚偽があれば摘発しようとする厳しい視線が控えており、職場自体が、間違いの許されない完全主義と他者配慮性が徹底された「病的規範」とも言うべき性格を帯びて、つねに緊迫感にさらされている。そういったほどほどにできない状況が持続すると、この調査で示唆されたように疲弊しきってしまい、ついにはうつ病や不安障害などのこころの病気になってしまう。また、職場のメランコリー親和型化には他方向の弊害もありうる。その完全主義的過重労働に加えて、成果主義、数値目標を掲げた短期利益追求などは、本質論、社会的規範、あるいは職場の連帯感を薄めさせて周囲ことなどかまっていられない状態となり、多くは職務への意欲・士気、そして職場への帰属意識を低下させる。そして、職場の病的規範によるゆとりのなさの反動が、団体や個人での虚偽ややらせに発展したり、パワハラ、セクハラ、使い込みなどの反則行為を引き起こす。選択項目の第1軸で示された、疲弊傾向から、「不満が強い」、「我慢ができない」などの中間に位置する項目を経て、身勝手傾向へという一つの流れを示唆するかのようである。

さらには、大人に余裕がなくなり、安心が得られなければ、子どもたちにも影響は及ぶ。その一つは、既述のわが国の子どもたちの孤独感の高さと自尊感情の低さである。また、不況の昨今、家庭の経済状況が教育に与える影響は大きいですが、一部では学歴・成績偏重、つまりよい成績をとってよい学校へいきよい仕事につくという競争が過熱しており、むしろその結果、成績以外の社会的スキルが身につけていない。その中には、極端に言えば、負けることを知らない、批難されることを知らない、思い通りにいかないことがあるのを知らない人が含まれている。少子化や家庭内構造の変化、また親の多忙さも加わって、家庭での教育や共有体験が不十

分となり、人との付き合い方がわからなかったりもする。アメリカや日本社会は、合理化過程の過剰な進展で逆に人間にとっての非合理的な状況を生み出す反人間的・脱人間化システムにはまり込んで“マクドナルド化 (McDonaldization)”していると揶揄される²⁷⁾²⁸⁾。その功罪か、ファーストフード、コンビニ、インターネット、電子メール、携帯電話などが生活の中に入り込み、“待たずに”“足を運ばずに”“人と接触することなく”“苦勞せずに”欲求が満たされ、結果として、児童・思春期・青年期に、大人から離れて遊び、働き、人と交わる、そしてうまくいかないからこそ工夫する、助け合うといった集団生活上の体験・訓練の機会が乏しいまま社会に舞い降りることも増える。順調に見えた人が、実社会で初めて経験した挫折で社会からひきこもる場合も多く、しかも30代~40代にまで高年齢化する傾向にある。また、待てない・我慢できない未熟な大人たちが、思い通りにならないことや他者に向かえば、クレイマー、あるいはDVや児童虐待の加害者になりうる。彼らは、社会性の欠落のために、周囲との関係性における安心・安定も得られておらず、転職、家出、再婚などを繰り返し、自分の描く身勝手な共有を追い求めることも多いという²⁵⁾²⁹⁾。これらもまた、学歴・成績偏重主義や共有体験の希薄化、あるいは合理化やテクノロジーの過度の浸透により、「他人の評価を気にしやすい」、「目先の結果にとらわれている」、「我慢ができない」、「自分のことしか考えない」など、今回一つのカテゴリーとして示された、近視眼的傾向に陥った結果ともとらえられる。

5. おわりに

「希望学」を研究する玄田は、“Hope is a Wish for Something to Come True by Action.”とし、希望は「気持ち (Wish)」、「何か (Something)」、「実現 (Come True)」、「行動 (Action)」の4本の柱を見つけることから始まるという³⁰⁾。安心は確実な結果を求める一方、希望は模索の過程そのものということだが、大丈夫という言葉をお互いかけあえる状況が希望を持てる社会には必要だとしている。そして、希望の社会化については、「社会力」の提唱者である門脇厚司のアドバイスを踏まえて、“Social Hope is a Wish for Something to Come True by Action Each Other.”と表現しており、興味深い。

精神科では、自己評価が低く、不安や抑うつを主訴とする神経症性障害や摂食障害などが増えていることを述べた。皆が評価され、厳しい目におびえ、本質論での反論を避け、良い子・良い人であることを余儀なくされる。良いか悪いかに偏り、自分らしくほっとする間がない。リスカ (wrist cut)・アムカ (arm cut) に走る人たちの「切るとほっとする」という訴えが、今を象徴している。彼女たちには、幼少期からの虐待を含めた、様々な外傷体験を有しているものも多い。そうした、ほっとする依存の対象を探し求めている人たちは、“あなたらしく・何か・やってみれば”というわれわれの誘いに対して、逡巡することが多い。その理由は、まずはほっと安心しないと、つまり安心できる状況がそろわなければ、希望へとは進むことができ

ないからである。

最後に、本研究には以下の問題点が含まれている。第一に、調査対象者数が少なく、対象者は著者が所属している県内者に限られ、また講演会や老人会の参加者で無作為に抽出した集団ではなく、65歳以上が半数を占める年齢構成でもあり、サンプルとしては偏りがある。次に、人々の振る舞いとして設定した選択肢は、一般的に悪いと思われる事柄である。さらには、人々の振る舞いに影響している事柄の選択肢の中には、高齢者にとって難しい表現が含まれている。よって本研究は、これらの問題点を含んだ上での限定された結果と考察である。

文献

- 1) 張賢徳『人はなぜ自殺するのか』勉誠出版, 2006.
- 2) 厚生労働省「平成20年患者調査」
- 3) 厚生省児童家庭局編『児童福祉五十年の歩み』厚生省児童家庭局, 1998.
- 4) 望月嵩「青少年と社会参加活動」『更生保護』59(9), 2008, 13-18.
- 5) グローバル化の進展に伴う価値観の多様化、労働環境の流動化・液状化、伝統的なコミュニティの崩壊、家族の不安定化、媒介され脱空間化された経験の一般化（インターネットの普及）等の要因によって、アイデンティティと社会的価値を保持しているという感覚の他者による承認が不確実になっていく。社会的承認が危機にさらされ、偶然に左右されているという感覚を「存在論的不安」(Fraser, 1997)と呼び、こうした感覚は、多くの論者によって指摘されている。例えば、ヤングはそうした感覚を「後期近代の眩暈」(Young, 2007)と名付け、バウマンはそうした感覚の蔓延した社会を「リキッド・モダニティ」(Bauman, 2000)として概念化している。社会的承認の不全が広まる一方で、分配的正義が侵害されているという感覚もまた拡大してきている。正規の働き方と非正規の働き方の格差が広がると同時に、そのどちらにつけるかが大きく運に左右されるという状況は、相対的剥奪の感覚を亢進させる。報酬のカオスと承認のカオスが結びつくと、「結局は金次第」といった拝金主義的な風潮が助長されやすい。相対化した世界における唯一の共通尺度としてお金への拘泥や「金で買えないものはなにもない」といった態度が、肯定的に、あるいは諦念を伴って、受容されつつあるのには、こうした背景があると考えられる。Fraser N. Justice Interruptus: Critical Reflections on the Post-Socialist Condition. Routledge, 1997 (＝仲正昌樹監訳『中断された正義－「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房, 2003). Bauman Z. Liquid Modernity. Polity, 2000 (＝森田典正訳『リキッド・モダニティー液状化する社会』大月書店, 2001). Young J. The Vertigo of Late Modernity. Sage, 2007 (＝木下ちがや他訳『後期近代の眩暈 排除から過剰包摂へ』青土社, 2008).
- 6) 本橋豊「自殺の疫学－自殺対策を支える自殺統計と介入疫学－」『臨床精神医学』39(11), 2010, 1371-1375.
- 7) 内閣府「自殺総合対策大綱」
- 8) World Health Organization. Preventing Suicide; A Resource for General Physicians. WHO/MNH/MBD/0.01, WHO, Geneva, 2000.
- 9) 鈴木國文「現在の産業精神科医療に欠けているもの－「ストレス」と「うつ病」に医療を越えて－」『精神科治療学』22(2), 2007, 201-206.
- 10) 厚生労働省「平成19年労働者健康状況調査」
- 11) 天笠崇『成果主義とメンタルヘルス』新日本出版社, 2007

- 12) 法務省「平成22年版犯罪白書」
- 13) 山崎久美子「蔓延する自己愛の病理」『現代のエスプリ』522, 2011, 124-135.
- 14) 福西朱美、福西勇夫「わが国に多い隠れナルシスト-非定型うつ病の精神病理との関連性より」『現代のエスプリ』522, 2011, 41-50.
- 15) 広瀬徹也「逃避型抑うつについて」宮本忠雄編『躁うつ病の精神病理』2巻, 1977, 61-88.
- 16) 阿部隆明「未熟型うつ病」『最新精神医学』6, 2001, 135-143.
- 17) 松波克文、上瀬大樹「現代型うつ病」『精神療法』32, 2006, 308-317.
- 18) 樽味伸「現代社会が生む“ディスチミア親和型”」『臨床精神医学』34, 2005, 687-694.
- 19) Stewart JW, McGrath PJ, Rabkin JG, et al. Atypical depression. A valid clinical entity? *Psychiatr Clin North Am* 16, 1993, 479-495.
- 20) 香山リカ『仕事でだけうつ病になる人たち 30代うつ、甘えと自己愛の心理分析』講談社, 2007.
- 21) 多田幸司「新しいタイプのうつ病概説」『こころの科学』146, 2009, 25-31.
- 22) UNICEF Innocenti Research Centre. Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries: A comprehensive assessment of the lives and well-being of children and adolescent in the economically advanced nations. 2007.
- 23) 古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告』光文社新書, 2009.
- 24) 岡崎祐士「「こころの健康政策構想会議」の提言の現状認識」『臨床精神医学』40(1), 2011, 5-13.
- 25) 大森晶夫「精神的健康・精神医学の視点から」福井県立大学健康長寿研究推進機構編『健康長寿と豊かな暮らし-稔りある人生に向けて-』2008, 169-193.
- 26) 加藤敏「現代の仕事、社会の問題はどのように精神障害に影響を与えているか」『精神科治療学』22(2), 2007, 121-131.
- 27) Ritzer G. The McDonaldization of Society. Pine Forge Press, 1993 (=正岡寛司監訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部, 1999).
- 28) G・リッツァ、丸山哲央編著『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房, 2003.
- 29) 岡田隆介「遷延した青年期と未熟な成人における「社会性の乏しさ」-臨床の中でどう扱うか-」『精神科治療学』21(11), 2006, 1191-1197.
- 30) 玄田有史『希望のつくり方』岩波新書, 2010.